

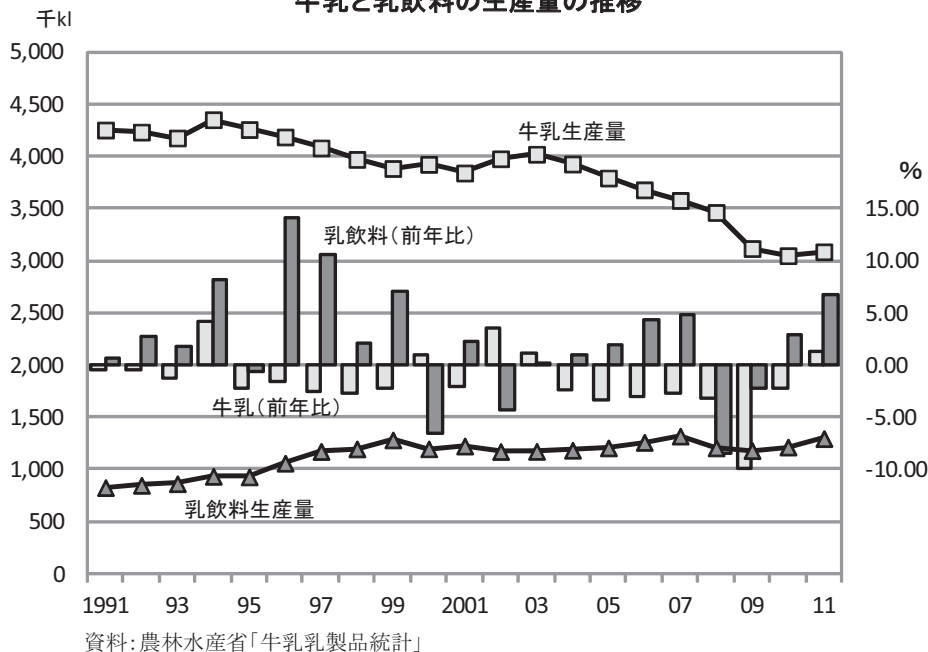
トピックス…② 拡大を続ける 乳飲料市場

わが国の牛乳生産量は、1994年度の4,351千kℓをピークにして減少に転じた。さまざまな消費拡大運動が展開されているが、最大の生乳仕向け先である牛乳市場の縮小傾向は近年も継続している。そのような状況のなか、成長著しい乳飲用市場が生乳の仕向け先として注目される。

乳飲料とは、生乳、牛乳、特別牛乳や乳製品を主原料とし、カルシウムやビタミンなどを加えて特定の栄養素を強化したり、果汁やコーヒーなどを加えたりして、消費者の嗜好に合わせて加工された飲料である。原料に生乳由来以外のものが使われていることが加工乳とは異なる。乳飲料には、いわゆる「白物乳飲料」と「色物乳飲料」とがあり、「白物乳飲料」はカルシウム、ビタミン、鉄、繊維などを加えて機能性を強化したもので、白色が基調である。他方、「色物乳飲料」はコーヒー、ココア、果汁等を加えて消費者の嗜好に合わせたもので、白色以外が基調である。

2011年度の1人1年当たり消費量は牛乳が24.1ℓ、乳飲料が10.1ℓで、いまだに両者の間には倍以上の差がみられる。しかし、牛乳生産量は1994年度の4,351千kℓをピークとして、2011年度には3,086千kℓまで減少したのに対して、乳飲料生産量は増加傾向を継続している。その結果、1994年の乳飲料生産量は936千kℓで牛乳生産量の21.5%であったが、2011年度には1,297千kℓで42.0%に増加している。以上のことから、乳飲料市場は、生乳の仕向け先として今後も拡大することが期待される。

牛乳と乳飲料の生産量の推移



乳飲料は、公正取引委員会の認定する業界団体「全国飲用牛乳公正取引協議会」が定める「飲用乳の表示に関する公正競争規約」において、表記の方法が次のように規定されている。2001年7月までは「牛乳」の要件（無脂乳固形分8.0%以上、乳脂肪分3.0%以上）を満たしていれば「乳飲料」についても例外的に「牛乳」の商品名をつけることが認められていた。しかし、同規約の改定により、例えば「コーヒー牛乳」や「イ

チゴ牛乳」などというような表記はできなくなり、消費者にとって牛乳との区別がつけやすくなった。

飲用乳の表示文句と成分要件(公正競争規約)

種類	表示文句	成分要件
牛乳	牛乳	無脂乳固形分8.0%以上
		乳脂肪分3.0%以上
加工乳	ミルク、乳	無脂乳固形分8.0%以上
乳飲料		乳固形分3.0%以上